編集後記

『國文學踏査』第三〇号をお届けいたします。前号の第二九号は平成三〇年三月の刊行ですので、約五年ぶりの刊行となります。時代は大きな変化を遂げ、大正大学もSDGs・持続可能な社会の実現に向けて、印刷物を減らすためのDX化を推進しています。当会もまた、その主意に賛同し、今号からリポジトリを主とした刊行となりました。

この間、日本文学科ではさまざまな変化がありました。平成三一年三月には大場朗先生、令和五年三月には小嶋知善先生が定年退職を迎えられました。加えて、令和三年三月には山本章博先生が転任されました。日本文学科を支えてくださった先生方には心から感謝の言葉をお伝えすると同時に、学科のこれからに向けてのご助言を賜りたいと考えております。なお、平成三一年一二月に伊藤雅光先生がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

そして、平成三一年四月には『源氏物語』をご専門とする古田正幸先生、令和二年四月には仏教説話といった中世文学をご専門とする渡辺麻里子先生、令和三年四月には副詞の研究を中心とした日本語学および日本語教育をご専門とする中川祐治先生、令和五年四月には音声学や社会言語学をご専門とする高田三枝子先生と、四名の先生方が着任されました。本学が掲げる理論と実践というスローガンのもと、フィールド学習の導入や地域・社会貢献の実践と、教育ビジョンも変化しています。日本文学科教員はよりよい授業のために研鑽を積むと同時に、それぞれが専門とする学問分野の発展のために研究活動にも励んでいます。『國文學踏査』第三〇号から、学科のそのような状況の一端が伝われば幸いに存じます。

（梅澤　亜由美）

これまで日本文学科の発展に力を尽くされた伊藤先生、大場先生、小嶋先生に、改めて心より深く感謝申し上げます。

前号刊行から現在に至るまでを振り返るとき、改めて新型コロナウィルスの「流行」が社会に及ぼした変化の大きさを痛感せずにはいられません。

ただ、その一方で、私たちにとって「不易」なものとは何かを見つめ直す大切なきっかけを得たのではないかとも思っています。日々、日本語・日本文学と虚心に向き合う楽しさ。思うままに教育研究活動に取り組むことができる喜び。それらが日本文学科（国文学科）の学生と教員によって受け継がれてきた伝統であるならば、そうした「不易」はこれからも大切に守りたいと思いを新たにしました。

（田中　仁）

今号では巻頭に小嶋知善先生の最終講義のご講演録をいただくことができました。小嶋先生にご教示いただいたことを活かして、日本文学科の教職員一同、一層励んでいきたいと思います。

また、研究論文については、時代順で古田、渡辺麻里子先生、田中仁先生、梅澤亜由美先生の四本が掲載にいたりました。今号は日本文学に関する研究成果を掲載することになります。次号以降は日本語学、日本語教育学などの成果も掲載することがかなえばと思いますし、大学院の修了生からの原稿などもぜひ投稿してほしいです。

良い教育のためには、良い研究を続けていることが大切だと思います。本学の熱心な学生に恥じない教育・研究を志していきたいです。

（古田　正幸）